

# 保育者養成における「保育実践力」育成のための学びの場 —模擬保育と学外実習に関する質問紙調査の結果からの考察—

松 山 由美子

保育専門職の養成に関して「保育実践力」を自ら育てていくことができる学生を育成するためには、「大学での学びと実習での学びの融合」を意識できる場の提供が必要だと考えている。筆者は、保育実践力を自ら育成する授業方法について2007年度より試行錯誤を重ね、そのような学びの場における学生の学びについて一定の知見をまとめた。しかし、これまでの結果は限られた人数で得られたものであり、学外実習を予定しているすべての学生に対して短期間で行うことは難しいものであった。そこで、学外実習の基本的・実務的な内容を学ぶ「教育実習指導」と、「保育実践力」の育成を学科全体で育成しようというねらいから、TT制で実施している「保育実践演習」の科目間連携によって、同様の学びの場がより効果的に構成できないかと試みた。本研究は、その実践と結果を報告する。

科目間連携による学びの場のリデザインの結果、少人数制の学びの場での学生の学びと同様に、自らの保育実践と保育のねらいや理想との間を行き来しながら、保育について考えようとしている学びの姿が見られた。しかし一方で、保育技術や保育準備について過大な不安をもつ学生や、また逆に、基礎的な理論・知識の習得および保育についての思考力に過大な不安が見られる学生については、実践と理論の融合を感じさせるような学びのサイクルが見られ難くなる可能性もあることが示唆された。

課題として、「保育実践力」を捉えなおすための保育現場からの視点との関連と、「保育実践力」を育成しようとする強力な学びの場を持つ可能性と今後の問題点について取り上げた。

キーワード：保育者養成、保育実践力、理論と実践の融合

## 1. 本研究の背景

筆者はこれまで、「保育実践力」について、文部科学省が提示する「実践的指導力」などを挙げながら、「保育について学んだ知識や考え方をもとに、自分がどのようなスタンスで保育者として子どもに向かうのかを意識したうえで、自らの保育技術をもって子どもの遊びを援助することができる力」であるとしてきた。しかし同時に、このような「保育実践力」は、2年間で完全に身につけることができるような容易な力ではないことも当然である。したがって、大学で学ぶべきことは、「保育実践力」そのものよりも、卒業後に保育者として子どもの保育にあたる時、保育実践力を自ら育てていくことができるような「保育技術の習得と向上、保育に関する知識の習得と同時に、上記のような保育実践力の『基礎を培う』こと」だとした(松山; 2008a)。

このような保育実践力の基礎を培うには、少人数での学びの場が有効であることが筆者のこれまでの実践結果より明らかにされてはきたが、できるだけ短期間で効率的に保育者を志す多くの学生に対して行うにはどうすればよいかという課題も残されていた。また、「保育実践力」を構成する要素の1つではあったが、筆者が2007年および2008年のカリキュラム開発の評価の観点として位置づけることができていなかった「保育案の作成能力」についても言及する必要があると考えていた。さらに、他の開講科目との連携や保育現場との連携がますます重要であり、大学の授業にTT制を取り入れる試みも学生の学びの可能性を広げることになると考えている(松山;2008b)。

本研究では、「保育案の作成能力」を取り扱う「教育実習指導Ⅱ」の授業において作成した保育案を、1・2年生合同で保育について広くかつ深く学ぶことを目的として実施されているティームティーチング制の「保育実践演習」の授業内に模擬保育という形で実施することによって、より多くの学生に「保育実践力」が意識されるのではないかと考えた。他の開講科目と連携することで、前回までで開発した少人数制のカリキュラムで学生が獲得した「学外での実習における学びと学内での学びが『融合した』という感覚」を、同様に多数の学生が持つことができるのかについて質問紙調査をもとに考察しようと試みたものである。

## 2. 本研究の目的と方法

本研究で定義している「保育実践力」とは、実習園やその場の子どもを観察し、関係をつくる力を前提とした、1) 保育案の作成能力、2) 作成した保育案を実践する技術力、3) 保育を実践し、反省し、次の活動に活かす課題を見出す力、である。2008年度までは、この目標を学生1人ひとりがより達成感をもつことができるようにするために、少人数制で、部分案作成と教材作成、模擬保育実施を通して、学外実習での学びと養成校での学びを振り返り、次の自らの学びの課題を見出す学習がより具体的に展開されるように構成したカリキュラムを、S大学短期大学部保育科で実施した。

しかし、「保育実践力」の基礎を培うことは、保育者を志すすべての学生に必要とされている学びである。そこで、S大学短期大学部保育科でより多くの学生に「保育実践力」の基礎を培うような学びの場を設定するにはどのようにすればよいかを考えることが次の課題であった。前年度まで筆者が試みた「保育方法論」におけるカリキュラムでは、受講する人数の制限、時間の制約が潜在的な課題として残されていた。また、S大学短期大学部「すべての学生」に対してこのような学びの場の提供を1人の教員で行うには限度があることも課題として残されていた。

そこで、S大学短期大学部保育科で保育科教員8名のティームティーチング制で開講されている1・2年生合同の科目である「保育実践演習」と、2年次の6月に行われる教育実習Ⅱの事前事後指導にあたる「教育実習指導Ⅱ」の科目とを連携させることで、S大学短期大学部保育科で保育者を志す100名程度の学生全員に対して、「保育実践力」の基礎を培う学びの場が提供できるのではないかと考え、保育案作成と教材作成は「教育実習指導Ⅱ」において行い、模擬保育を「保育実践演習」で行うこととした。

本研究では、この実践の結果、学生はどう学び、どう考え、最終的に保育に対する意識がどのように変化したかを調査することで、学びの場の有効性と学生の育ちを明らかにすることを目的としている。

概要と内容の実際は以下のとおりである。

対象学生：S大学短期大学部保育科2年生107名（女子105名，男子2名）

実施科目：教育実習指導Ⅱ（S大学短期大学部保育科2年生開講）および

保育実践演習（S大学短期大学部保育科1・2年生開講：保育科全教員参加）

実施期間：2009年4月～7月（半期：90分×15回）

学外実習（教育実習Ⅱ）：2009年6月1日～12日の2週間

実施要領：以下のように実施した。

- ①4月から始まる「教育実習指導Ⅱ」では、教育実習指導Ⅰの振り返りと復習の後、5月7日（木）を期限に、25分程度（30分以内）の保育案の作成を課題として学生に出した。
- ②提出された保育案をもとに、5～6人のグループに分け、模擬保育で使用する教室および担当教員を決めた。学生が提出した保育案の多くは製作の設定保育であったため、各教室の担当教員の専門性は考慮できない状況であった。結果、21グループに分かれ、11教室を使用し、教員8名が1～2教室を巡回しながら観察することとした。また、子ども役として1年生全員および2年生で教育実習Ⅱに参加しない学生を4～5人のグループに分け、2年生の各グループに入れることができたようにした。
- ③模擬保育は2009年5月18日（月）および5月25日（月）の「保育実践演習」にて行った。90分で3人が模擬保育を担当している。模擬保育中、2年生は、先生役の学生以外はすべて子ども役で参加することとした。したがって、1人の模擬保育に子ども役の学生がおよそ10人いることとなる。なお、屋外ゲーム等を保育案として提出した学生のところには、隣の教室ですでに模擬保育が全員終了したグループの学生を子ども役で追加することもあった。この両日とも、参加した全ての学生に記録シートを書かせて提出させている。2年生には直後の感想や意見を自由記述で述べてもらうものが中心で、1年生には、先輩の模擬保育を体験して思ったことや今後の自分についての記述と自己評価を書いてもらった。
- ④2009年5月28日（木）「教育実習指導Ⅱ」の授業中に「模擬保育の振り返り」ということで、模擬保育直後の興奮した状態から少し冷静になるよう振り返ることと、直後に控えた学外での実習「教育実習Ⅱ」について課題を再設定することを目的とした記述式の質問紙調査を実施した。調査の際、模擬保育でのグループごとの保育案集を調査紙と同時に配布し、学生がお互いに模擬保育を振り返りながら意見交換を行うことを奨励した。
- ⑤2009年6月1日（月）～12日（金）まで「教育実習Ⅱ」
- ⑥2009年6月15日（月）の「保育実践演習」で、今までの学外実習を振り返ることを目的とした質問紙調査を行うとともに教育実習Ⅱでの責任実習（部分・全日とも）の内容についての調査を行った。

⑦2009年6月18日(木)の「教育実習指導Ⅱ」では、事後指導の1つとして「教育実習Ⅱのまとめ」というA4用紙4枚にわたる詳細な質問紙調査を実施した。実習の流れを日誌や手帳を見ながら再確認し、自己評価、園で褒められたこと、注意を受けたこと、失敗したこと、自信を持てたことなどを記述させるとともに、55問にわたる自己評価チェックリストに答えさせた。そして、模擬保育から学外実習を終えての自らの思いの変化を改めて問い、次の保育実習Ⅱおよび保育実習Ⅲや就職活動への課題を考えさせた。

学生の意識の変化については、模擬保育後や学外実習後の質問紙調査によって明らかにする。本研究の調査に関して使用した質問紙およびその概要は以下のとおりである。

- ・2009年5月28日「模擬保育の振り返り」：調査人数107名(うち男子3名)【女子1名は模擬保育に子役としての参加はあったが自分が模擬保育をする日に欠席しているため、自らの実践についての回答部分は空欄であった】
- ・2009年6月15日「保育実践演習Ⅲ 第10回記録シート」：調査人数106名(うち男子3名)【女子1名は実習時期が変更になったためデータより除外した】
- ・2009年6月18日「教育実習Ⅱのまとめ」：調査人数107名(うち男子3名)【実習時期が変更になった女子1名は、実習終了後の2009年9月24日に実施】

自由記述に関しては、テキストマイニングの手法を用いて学生が使用した単語の出現頻度や出現件数を調査した。TinyTextMinder (version0.64)を用いて、分かち書き処理を行った後、助詞等の不要な単語を除外したうえでキーワード抽出処理を行った。また、必要に応じて係り受け分析を行った。

### 3. 「保育実践演習」と「保育実践力」

「保育実践演習」はS大学短期大学部保育科2年間の学修を貫くように、また、2年間の学内での学びと学外実習とを繋ぐように設定されたS大学短期大学部保育科独自の開講科目である。特徴は、保育科の8名の教員が全員指導にあたる科目であるということや、ランダムに全員を1・2年生混合の7つのグループに分けて、時には共に、時には各学年に分かれて、時にはグループを越え全体で、といったさまざまな形式で講義を展開するところにある。したがって、今までにはできなかった異学年の交流や教えあい・学び合いといった活動や、学外の地域の保育現場との連携などができるようになっている。

この科目を設定するにあたっては、四天王寺大学短期大学部保育科(2009)『平成20年度「保育実践演習」報告書』の冒頭にあるとおり、保育科学生の自己形成についての基本的な課題は、「学内での授業と学外実習との連携のあり方であり、直接的には実習事前指導と実習への導き、実習体験と事後指導による振り返りをどのように仕組むのか」という点にあったが、学生の2年間にわたる保育者の基礎に通じる自己形成への見通しと、各科目の学修内容との関連づけを通して養成されるべき保育認識の総合化を図るというのが、学科内で共有されてきたアプローチであり、それは現在も変わらないところである」ところから始まっている。本研究で問おうとしている「学外実習と学内での学びの融合」「保育者としての基礎を培う」試みと共通している。

具体的に、4月から7月にかけて行われる「保育実践演習」は、「子ども・保育と出会う」をテーマにして学ぶ1年生と、「子ども・保育とかかわる」をテーマにして学ぶ2年生が共に学ぶことになる。

1年生は、自己紹介を通して自己を開くことで初めて保育や子どもと出会うことができるという学修活動を中心に、マナー講座を受けたり、2年生の模擬保育に子ども役として参加したりする。また、卒業し保育職に就いている先輩、保育現場の園長・所長先生の講演を聞く活動も含まれている。

2年生は、模擬保育を一人ひとりが責任をもって行う活動や、実習体験を語るなどの活動で1年生とかかわることで、自らの子どもや保育へのかかわりについて改めて考える契機となるようにしている。保育現場の園長・所長先生の講演を聞く活動では、自らの進路について、また、夏休みにある保育実習について明確な課題を持って取り組むことをねらいをしている。

以上に述べたような目的とシラバスを持った科目のため、各教員が各々の担当科目と連携する可能性が高くなることも示唆されている科目であることが分かる。

この性質を利用して、筆者は今回、「教育実習指導Ⅱ」の科目との連携を考えた。

「教育実習指導Ⅱ」はその名のとおり、教育実習Ⅱに関する事務的な内容と実質的な指導を含む科目である。各種書類の提出について、日誌の書き方、保育部分案の書き方など、保育のねらいや思い、保育観の形成とはまた違うアプローチで進めていかなければならない。

しかし、保育へのねらいを深めたり、自らの保育観を見直したりすることができるようになるためには、事務的な処理をこなす基礎的な常識や態度、観察した活動について記録を取る作業や、自らの保育観や保育したい内容を保育案として文字化する作業ができなければならないことは言うまでもない。それは、「保育実践力」が、実習園やその場の子どもを観察し、関係をつくる力を前提とした、1) 保育案の作成能力、2) 作成した保育案を実践する技術力、3) 保育を実践し、反省し、次の活動に活かす課題を見出す力であることとも一致している。

一つの科目で一人の担当者が行うカリキュラムで「保育実践力」のすべての要素を培おうとすると限界が生じる。さまざまな専門性を持つ保育科教員が「保育実践力」を育てるという意識を共有し協力しあう科目である「保育実践演習」を核に科目間の連携を行うことでこそ、保育者を志望する全学生に学びの場を提供できるのではないかと考えた。科目を連携させたよりダイナミックな学びの場を構想することで、学生は、一方では、実務として記録を取ったり保育案を計画・作成したりする作業を行い、他方では、集団の中で自分が考えた作業を模擬保育という形で実践した上で、お互いの模擬保育を確認しあうことができるような作業が可能になるのである。

#### 4. 質問紙調査の結果から見る「学生の学び」

本章では、模擬保育終了後および学外実習終了後に行った質問紙調査の結果について、調査紙ごとに報告する。



(1) 模擬保育直後の記述調査「模擬保育の振り返り」より

模擬保育直後にも感想や意見を記述式で書かせているが、記述する時間が充分に取れなかった学生がいたことも考慮し、少し冷静になって振り返ることができたこの質問紙調査から学生の模擬保育への感想や保育への意識について明らかにしようとした。

調査の際、模擬保育でのグループごとの保育案集を調査紙と同時に配布し、学生がお互いに模擬保育を振り返りながら意見交換を行うことを奨励しているのもこの調査の大きな特徴である。それは、自らの保育や保育観を振り返る時に、前年度までの筆者の実践より「ビデオを用いて自らの保育を客観視して見直すこと」が有効であるという結果から導いている。今回は21グループに分かれての模擬保育の実施だったため、ビデオ撮影することや、仮に撮影ができてこの話し合いの場で全員が模擬保育を視聴することが不可能なため、できるだけ、意見交換を行うことで、他者の意見を聞きながら自らの模擬保育を客観化する作業ができないかと考えたからである。

以上のような雰囲気の中で、学生が回答した結果は表1および表2のとおりである。多くの学生が「ねらいは達成できた」だけでなく、「保育への考え方が変わった」と答えていることが分かる。また、ねらいの達成感と保育への考え方に変化が生じたかどうかをクロス集計した結果が表3である。「ねらいが達成できなかった」が、「保育への考え方が変わった」と回答した学生が21名いることから、ねらいが達成できたと感じるかどうかと、保育への考え方に変化が生じるか否かにはあまり関連がないのかもしれない。クラメールの連関係数も  $\eta = 0.354$ と

表1 模擬保育でのねらいは達成できたか

	人	%
はい	78	72.9
「はい」と「いいえ」の間に○	4	3.7
いいえ	23	21.5
無回答 (欠席者1名含む)	2	1.9
計	107	100

表2 模擬保育で保育への考え方が変わったか

	人	%
はい	96	89.7
「はい」と「いいえ」の間に○	2	1.9
いいえ	7	6.5
無回答 (欠席者1名含む)	2	1.9
計	107	100

表3 ねらいの達成感と保育への考え方の変化のクロス集計【単位：人 (%)】

	保育への考え方が変わった	変わったとも変わらないともいえない	保育への考え方は変わらない	無回答	計
ねらいが達成できた	71 (66.4%)	1 (1.0%)	6 (5.6%)	0 (0%)	78
ねらいは達成できたともできないとも言えない	3 (2.8%)	1 (1.0%)	0 (0%)	0 (0%)	4
ねらいが達成できなかった	21 (19.6%)	0 (0%)	1 (1.0%)	1 (1.0%)	23
無回答	1 (1.0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1.0%)	2
計	96	2	7	2	107

なり、達成感の有無と保育への考え方に変化を生じさせるかどうかについての相関は非常に弱いことが明らかになった。

次に、ねらいを達成できたと思った理由および達成できなかったと思った理由について、自由記述より出現頻度を計算した。その結果、「達成できなかった」もしくは「達成できた」と明確に回答した学生に多く見られたキーワードが、「する」「できる」「楽しい/楽しむ/楽しめる」であった（表4参照）。

表4 ねらいの達成度に関する頻出キーワード

	達成できなかった	どちらともいえない	達成できた
する	15	6	41
楽しい/楽しむ/楽しめる	7	0	34
できる	11	3	26
思う	3	3	22
子ども	10	1	10
みんな	0	1	17
なる	2	0	11
つくる/作る	1	0	11

記述を詳細に見ると、ねらいを達成したと回答した学生は、「楽しく描いてもらえたし」「興味を持って楽しんでくれて」「子ども役のみんなが楽しそうにしてくれていたから」「楽しんで遊べた」という記述が多く、「みんな/子ども」が「楽しんだ」、もしくは、「みんな/子ども」が「できた」からと答えている傾向が高かった。逆にねらいを達成できなかった学生の記述からは否定形が多く見られ、具体的には「子ども役の人たちに盛り上がりがなく、自分の説明不足もあった」「子どもも出て来て混乱して楽しめなくなったから」「違いに気づいてくれたかも知れないが、楽しめるまでは達成できなかった」というように、子ども役の学生が楽しめなかったと感じていたり、時間が足りず想定していたところまで到達できなかったり、自らの保育技術への反省をしたりしている記述が多く見られた。

以上より、学生にとって、子どもが「楽しむ」ことや、子どもが何かを「できた」ことがねらいを達成すると感じるための大きな要素になっていることが明らかになった。

続いて、「保育への考え方が変化した」と回答した学生の理由の記述についても達成感の理由同様分析し、さらに「係り受け解析」を行った。なお、「保育への考え方」について「変化しなかった」と回答した学生の全員の質問紙調査を見たところ、理由の自由記述が1名を除き空欄であった。今回は理由が書けなかったのか書きたくなかったのかについての追及は行っていない。

結果、表5のとおり「実際にやってみると」などの記述に見られる「実際+やる」や「保育+する」が上位に出現し、あとは、実際に動く動詞と「思う」「考える」などの思考を表す動詞の組み合わせが上位に見られることが明らかになり、達成感を感じた理由で上位に登場する「楽しい」というキーワードは比較的下位になってから出現することが明らかになった。模

擬保育を行うことで、自らが保育に対して考える時、単純に子どもが「楽しい／楽しんでいない」と感じたり、子どもが何かを「できた／できなかった」と評価したりすることだけではなく、自らの立てた「ねらい」を踏まえて保育技術や保育観を見直そうとしていることが分かる。

実際に記述されたものを抜粋すると、「やはり指導案通りにはいかず、予想外の事もたくさん起こり、本当に臨機応変に対応する事が大切だと

思いました。また、きちんとねらいを決め、何でも援助するのではなく、見守り、声かけも「きれいだね」と言うのではなく、もっと自分の中のポキャブラリーを増やさなければいけないと思いました。本当に子どもの事を見て、保育をしていく事が大切だと思いました」「模擬保育をやってみて、大学生がやってみても予想外の展開が起きました。実際に子どもたちの前でしてみるともっと大変だと思います。“考えていた保育”は“自分を表現する”ということでしたが、そのための保育者の援助活動は大切だと実感し、実習へ行って保育者の方々の言葉がけなどは、よく観察すべきだと思いました」というように、保育案と実践の違い、ねらいの大切さ、保育者としての援助（特に言葉がけについて課題を感じている記述が多かった）などを関連させて考えていることが分かる。

また、「準備の大切さやもっと上手く伝えられるようになりたいと感じた」「やっぱり考えている進み方と実際の進み方のスピードが、全然違っていたので、考えるだけではなく、経験を積む事が大切だと思いました。あと、自分の発想と子ども達の発想が全然違っていたので、そういうのがあってもすぐに対応できる様にならなければいけないと思いました」「時間の配分や、製作を終える人の個人差など、細かく考えなければいけないと感じました。その反面、模擬保育を終えた後も、製作したものに触れている生徒も見られたので、1つの作業でも、子どもたちに残るものがあるのかもしれないと嬉しく感じた面もありました」など、時間配分や準備の大切さと自らの保育技術（保育者としての援助）について考えようとしているものもあり、さらにその考えから「子どもの思い」についてまでめぐらせているものも見られた。

また、「あまり自由にさせすぎるとダメなのかな・・・と考えたり、何が正しいのかよくわからなくなりました。その時の言葉掛けが特に大切だと感じました」「もっと自分がしたい保育をよりいっそう具体化したい」と、学外実習に向けて、悩みながらも前進しようとしている学生の姿も見られた。

表5 保育への考え方の変化の有無について回答した理由に使用されていたキーワード（係り受け解析：上位のみ）

実際＋やる	10	自分＋する	3
保育＋する	10	子どもたち＋楽しめる	3
考える＋思う	10	必要＋ある	3
する＋思う	9	子ども達＋楽しむ	3
大切＋思う	8	製作＋する	3
もっと＋考える	6	考える＋大切	3
考える＋考える	5	考える＋必要	3
自分＋考える	5	思う＋思う	3
難しい＋思う	5	全然＋違う	3
声かけ＋する	4		
準備＋する	4		
もっと＋する	4		
ある＋思う	4		



最後に、「保育への考え方」の変化について「はい」と「いいえ」の間に○をした2名の学生の理由を見直した。その結果、「考え方はかわっていないけれど、思いは少し複雑になりました」と「子ども達に、実際やってみたい。もっと楽しめるような保育をするにはどうしたらいいのか」と書かれていた。このことから、決してこの2名も保育への考え方について変化がなかったわけではなく、前者は「保育に対するの根本の思いは変わっていないが、もっと保育が奥深いものだ」と考えているのかもしれないと考えられ、後者は「変化の途中であるという気持ちを伝えたい」のかもしれないと考えられる。

## (2) 学外実習後の記述調査「保育実践演習Ⅲ 第10回記録シート」より

2週間の幼稚園での学外実習を終えた学生に対して、まず、2009年6月15日に調査した「保育実践演習Ⅲ 第10回記録シート」より、実際に学外実習で行った責任実習（全日・部分）の内容についての結果をまとめる。

まず、模擬保育と同じ保育を行った学生は106名中19名であった。次に、「同じグループの友達が行った模擬保育と同じ（修正含む）内容」が17名、「違うグループの友達が行った模擬保育と同じ（修正含む）内容」が25名と続いた。自由記述欄には「模擬保育と同じ内容は自分が担当した年齢では難しいと思った」「子役で参加して楽しかったから」「仲のよい友達の指導案を見せてもらってやってみようと思った」というような理由が挙げられていた。同じグループの学生の指導案集は配布したが、学生たちは学習グループを超えて、自主的に各々の指導案集を見せ合ったり、コピーしあったりしていたことが明らかになった。

また、「幼稚園から指示された内容」が13名、「上記のどれにも当てはまらない内容」が45名いた。合計して107名を越えるのは、1人が複数回（平均1.25回）責任実習を行っているからである。なお、「上記のどれにも当てはまらない内容」については、他の講義や演習（保育内容「環境」や「音楽」）で学んだ内容を挙げている者が7名いた。

以上より、約半数の51.3%が今回の模擬保育で扱われた内容を学外実習でも行おうとしていることが分かった。

## (3) 学外実習後の記述調査「教育実習Ⅱのまとめ」より

2週間の幼稚園での学外実習を終えた学生に対して、実習終了後に実施した「教育実習Ⅱのまとめ」を中心に、学生の意識の変化を見ていく。この「学生の意識や保育への考え方の変化」については、1) 部分案作成から模擬保育終了後、2) 学外実習を終えて現在、3) 今後の自分の課題、についての結果より探していきたい。

まず、部分案作成から模擬保育終了後を学生が振り返った記述から、どのような考え方をもっていたかを見直す。学外実習前に行った、「模擬保育の振り返り」での「保育への考え方の変化」についての記述で見られたキーワードとほぼ一致するが、1008件の単語が抽出されていたのが、この調査では1306件に増加していることが明らかになった。自らの考え方を振り返る行為が、自らの経験によってより深まったり広がったりしているとともに、その思いを自ら記述しようとする意識が強まっていることの表れではないかと思われる。

次に、学外実習を終えて現在の保育への考え方についての記述から、学生がどのように保育について考えているかを探る。抽出されたキーワードは1667件とさらに増加していることから、先に述べたように「自らの考え方を振り返る行為が自ら経験を積み重ねることによって、より深まったり拡がったりしている」のではないと思われる。さらに、これまでに挙げた記述からはあまり見られなかった「保育者／先生」というキーワードの出現、係り受け解析からは、「先生+なる」が上位に見られるようになっているのも、この時期ならではの学生の考えの特徴として挙げられるであろう。具体的には、「担任の先生とも事前に相談をして「難しいものではなく、簡単なもので自分が保育を進めやすいものをしてください」とアドバイスを頂き、設定保育に臨みました」「先生たちは日々保育していて、改めて尊敬しました」「自分がめざす理想の先生像ができました」という記述に見られるように、学外実習での担当教諭との出会い・学びから自らの保育への考えをまとめたものや、「絶対保育士になりたくないと思っていましたが、今回行って、保育士がいい仕事だと思いました」「絶対幼稚園の先生になる!」という気持ちがさらに強くなりました」というように、自らの進路と重ね合わせて考えているものが見られた。また、8月に取り組むことになっている保育所や児童福祉施設での実習に向けての課題や、「次の実習が楽しみ」と意欲の向上を記述したものも見られた。

次に、「今後の自分の課題」の質問への回答をまとめる。

『『子どものうた』の持ち曲を1つでも多くする!! 1週間に1個、1ヶ月で4個』『手遊びのレパトリーを増やす、子どものうたを半年で20曲覚える』など、ピアノに代表される音楽表現の能力の向上に代表されるようなさまざまな保育技術に関する能力の向上を具体的に示した課題と、「伝えたいことを伝えることができる保育を行う」「ねらいをしっかりと考えられるようになる」などといった保育への考え方に関する課題と、大きく2つの項目に分類できると考えた。

しかし、中には「子どものそれぞれの場面に合った言葉かけ、援助を見極める」「一人ひとりの子どもたちの個性を理解して関わること」といった記述も見られた。このような記述に関しては、保育技術に関する課題ではあるが、具体的な課題というよりは保育への考え方から派生する課題として捉えられ、「保育への考え方に関する課題」に分類した。

以上のように、大まかに課題を2分類したところ、具体的な課題のみの学生は33名、考え方についての課題（考え方から派生する課題）を書いた学生は60名であった。なお、どちらにも言及した学生は14名であった。

最後に、模擬保育実施後の「考え方が変わりましたか」で「いいえ」および空欄だった学生については、意識の変化を詳細に見ることにした。

空欄だった学生2名のうち1名は、模擬保育を行うことができなかった学生である。そのため、保育への考え方の変化を問われても回答できなかったということである。しかし、子ども役として参加し、学外実習を終えて振り返った結果、「実習を時間計画内に終わること、保育の順番を計画通りに進めることが本当に大切だと感じました」と回答し、「手遊びのレパトリーを増やす、子どものうたを半年で20曲覚える」といった具体的な課題を挙げていた。もう1名は「幼稚園への就職は一切考えていませんでした。しかし、今回実習に行かせてもらって、

就職してみたい、先生という職に就いてみたいという気持ちが生まれました。そう思えるようになった深い実習でした」と学外実習後に記述していることが分かり、模擬保育の時点では、保育職への志望がなかったことが明らかになった。そのため、ねらいが達成できたかどうか、自らの模擬保育への反省点についてはしっかりと記述できているが、保育観についてまで考えることはせず、またする必要もないと考えていたのではないかと思われる。

考え方が変わりましたかの問いに「いいえ」と明確に答えている学生については、いくつかの特徴が見られる。

回答こそ「いいえ」だが、自らの保育観と向き合おうとしているように見られる学生は、考え方が変わったのではなく「考えの幅は広がったと思う」と、理由を明確に記述しており、あまり問題はないと考える。この学生は、模擬保育後は、「その場で勢いで乗り越えられる」と思っていたがそうはいかないと知ったことや、学外実習後の振り返りでは「実際にしてみると、子どもたちを優先している、もっていたねらいが多少なりともおろそかになってしまう。また、実際に部分実習を通して、あまりにも保育技術の少なさを実感しました」と記述しており、「こういった活動としてねらいや思いをもって進めていくかをしっかりとっていけるようにする」と、考え方を見直すような課題を挙げている。

自らの今後の課題に「自信をもって弾き歌いや部分保育ができるようにする」と答えた学生も、「だいたいじゃすまないと思った」「細かい部分まで考えて案を作らないといけないと思いました」と模擬保育終了後に自分を振り返り、「考えているより保育は奥深いものだ改めて思いました」と学外実習後を振り返っている。この学生は、最初は自信のなさから保育観についてまで言及できなかったのかもしれない。同じように、模擬保育について「最後までやりきることしか考えておらず、いっぱいいっぱいだった」と答えている学生もいた。この学生は、学外実習で現場の保育者から「最終的にどういう保育をあなたがしたいかを考えて就職などに、今後つなげてみては…」と言われたエピソードを書き、それに対して「でも、今の私にはまだどんな保育をしたいかわからない」と答えている。しかし、この学生は課題として「ねらいをしっかりと考えられるようになる」と挙げていた。最初は自信もなく、保育を進めることにしか意識を向けることができていなかったが、保育観について考えることを明示されたことで、ようやく自らの実践と自らの保育観について互いに関連させながら考え直そうとし始めたと思われる。

今後の指導について大きな課題となるであろうと思われるのは次の4名である。

模擬保育は「みんなが楽しんでくれた」から問題ないと考え、学外実習も「勉強になった」と答え、課題も具体的なもののみを挙げている学生、「部分案でかいたのとは、同じようには進まず、とても焦りました」と答えているものの、学外実習を経ても「もっと保育技術を身につけていきたい」としか振り返っていない学生、「準備をするにこしたことはない」と模擬保育を捉え、学外実習についても「注意も全然されなかったから、日々自分に足りないところは何かを考えて実習できた」と回答している学生群である。この3名については、「キャリアセンター（就職課）に通いまくる」「公立試験の本を1冊終わらせる」などというように、就職したいという意欲は今後の自分の課題における自由記述にも表れているし、問題なく模擬保育

も学外実習も終えた学生たちであるが、これらの学生に共通して言えるのは、保育について省察している姿が全く見られないことである。それが単に記述されていないだけなのかもしれないが、記述するところまで自らの保育観、保育のねらいについて意識化されていないことは明らかである。

さらに、あと1名は、2年生の学外実習を振り返っても「日誌の勉強をすればよかった」しか書けず、実習終了後の課題としてまだ日誌の書き方についてしか言及していない学生である。この学生についても、模擬保育および学外実習も終えているにもかかわらず、保育についての技術や保育観を振り返るといった学修以前の段階でとどまっていると言えるのではないだろうか。

## 5. まとめと今後の課題

今回の調査からは、多くの学生の記述より、模擬保育を行うこと、また模擬保育を行ってから学外実習を行うことで、自らの保育への考え方を見直すという作業を促していることが明らかになった。また、このような作業を支える力として、仲間の存在や現場の保育者のアドバイスなどが非常に大きいことも示唆された。学生たちは、模擬保育終了後の情報交換を通して、模擬保育で自らが行った保育よりも友人の模擬保育に興味を示したり、実際に保育現場で行ったりしているところからも明らかである。

結果として、養成機関における科目間の連携や保育現場との連携が、学生の保育実践力の基礎を培うために有効な学びの場を作り出しうることが明らかになった。それは、今回の実践が「教育実習指導Ⅱ」と「保育実践演習」の連携で行われたことだけでなく、学生が模擬保育や学外実習での保育のテーマを設定するにあたり、S大学短期大学部の保育科で開講されているさまざまな科目を通して学んだり、実際に授業内で体験したりしたものを選んでいることから明らかである。

また、今回の結果から、保育を実践する試みを通して推察できる多くの学生の思考過程は、単純に子どもが「楽しい／楽しんでいない」と感じたり、子どもが何かを「できた／できなかった」と評価したりする段階にとどまらず、ねらいを達成するとはどういうことなのか、そのために自らがどうすればよいのか、それは結果的にどのような保育を提供することになるのかと考える、螺旋状のプロセスをたどるのではないと思われる。

筆者は前稿（松山;2009）において、学生の「理論と実践の融合のイメージ」は「保育理論」部分と「保育技術」「保育準備」の部分の双方が関連して循環することで成り立っている

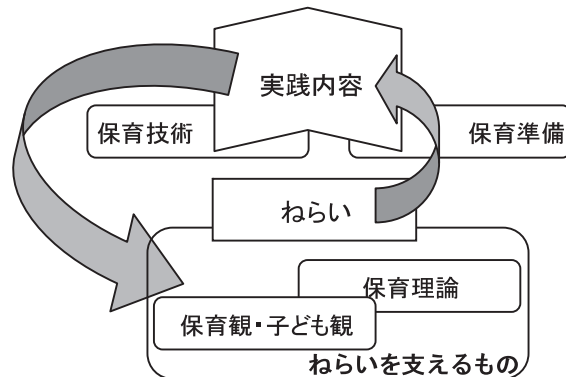


図1 学生の「理論と実践の融合」のイメージ

ることを示したが、このことが改めて明らかになった。

例えば、保育技術や準備への不安は保育実践に影響を直接及ぼすが、この次元でとどまっていると、自らの保育観を考えるとことや保育の理論について学ぶことの意義を感じるところまで到達しない可能性もあったことから考えられる。

また、基本的な保育理論を理解する学力や日誌作成などの基礎的・実務的な力を確実に身につけさせることも必要であることが明らかになった。保育実践が不安で保育観を考えるとこれまでたどり着かないのと同様に、保育理論を理解し、自らの考えを持つという基本的な力に不安があると、保育実践を行っても実践が深まることはない可能性もあるからである。

模擬保育であれ、学外実習における責任実習であれ、保育を実践する際に必要な保育技術や保育への準備については図1のとおり、何も考えずに実践しても気づくことがある可能性が高いかもしれない。しかし、自分が保育にねらいを持って取り組むことで、実践が深まるだけではなく、学内での理論の学びの必要性も深まり、結果として保育技術の修得や保育準備の必要性に気づくことにつながる方が、はるかに学生の学びとして肝要な姿であることは言うまでもない。

しかし、その一方で、ただ模擬保育を成功させること、学外実習を成功させることで問題意識がとどまってしまう学生の存在も明らかになった。このような学生に対して、見かけだけの成功を追うのではなく、保育観について考えることと、自らの保育観を常に見直す作業が保育実践の充実につながることの重要性について、どのように指導・援助していくかが今後の課題の1つである。この課題を解決するためにも、今回の学生の質問紙調査の結果について、教員間連携で行われている科目「保育実践演習」を支えている保育科の教員からの検討も今後進めていかなければならないことは言うまでもない。

また、模擬保育に子ども役として参加した1年生に対して、「(2年生の模擬保育から) 学ぶべき点がみつかったか」などを尋ねた質問紙調査の結果とのつき合わせも今後進めていきたい。なぜなら、「仲間との話し合い」や「仲間とのかかわり」が学生の保育実践力の基礎を培うために必要な要因であることはすでに明らかになっており(松山; 2009など)、今回の結果も、模擬保育を行ったグループ編成が、達成感の感じ方やその後の保育実践への姿勢に影響が出るかもしれないと考えるからである。

最後に、今後の研究への大きな課題として次の2点を考えたい。

1点目は、保育現場から養成校に求める実習生の姿と保育実践力との関連である。大岩ら(1999)は「保育における実践的指導力」について、現場の保育者が学生に求める実践的指導力として、「子ども理解」と「指

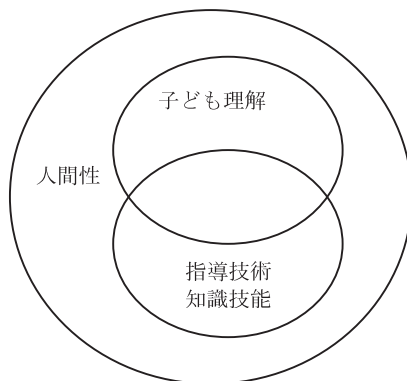


図2 保育者が求める実践的指導力(大岩ら, 1999)



導技術・知識技能」の2つの基礎として最も大きい要素として、「人間性」の資質があることを明らかにしている。保育現場の保育者が養成段階の学生には、「まず社会生活がきちんとできる常識を持つことや基本的な生活習慣の獲得が基本的で最も大切」と考えていることを述べたうえで、保育現場から養成校への課題として「子どもの気持ちを感じ取れるやさしさやしなやかさ、感性、好奇心といった自発的な学習意欲、協調性や社会性を育成すること」を挙げている。この大岩らの示した「保育現場から養成校に求める課題」は、自分で保育を考え、その保育を実践し、仲間とともに振り返り、子どもの気持ちに気づき、自らの保育への思いや考えを深めるという循環作業の中で、保育技術を身につけたり、保育準備を行ったり、保育理論を学んだりという作業があることを示している図1のサイクルに共通する部分も見られる。大岩らの挙げる「人間性」の資質が、筆者が示した図1のサイクルを円滑に循環させるために必要な要素の1つではあるだろうが、それをどのように示すべきかについても今後の検討課題である。このことは、池田ら(2009)の述べる、「保育現場が求める実習生のイメージ」調査の結果からも示唆される。池田らは、保育現場が求める実習生のイメージは「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」に大別されることを明らかにしている。「学ぶ姿勢・態度」を形成する要因として高いものから「指導を素直に受け入れる態度」「適切な言葉遣い」「行動力」「反省できる洞察力」「豊かな表情と物腰の柔らかさ」「観察力」「指導の先生とのコミュニケーション」「反省を翌日の実習に活かせる実践力」となっており、「保育実践のスキル」の要因としては、高いものから「発達と遊びを結びつけた実践ができる」「季節の遊びを知っている」「子どもの無理な欲求にも論理的に対応できる」「子どもの発達理解」「子どもの姿から指導案が書ける」などとなっている。保育実践力は、池田らの結果の「姿勢や態度」と「スキル」を包括したものと考えられるが、池田らの結果からも、大岩らが挙げた「人間性」の部分に相当するものが含まれていることが分かる。このように、保育現場が養成校および実習生に求める課題からアプローチすることも、今後、保育実践力を考える際に参考になる側面ではないかと思われる。

2点目は、カリキュラムが及ぼす学生への保育への意識や影響という視点である。鈴木・小平(2008)、小平・鈴木(2008)は、保育科において、教員の連携のもとに行われる保育の専門性に特化した強力な取組が、保育への意識が中程度層の学生に対してはその意識高め意欲を引き上げる効果を持つと同時に、保育への意識が下位にある層の学生には効果が少ないことを明らかにしている。そのため、意識下位層の孤立が顕著ならないように、またどのようにしてこの層の意識や意欲を引き上げるかを課題として挙げている。

今回の実践でも、一部ではあるが、模擬保育への参加態度について、準備不足など若干の問題があると見られる学生や、自らの実践の振り返りができていない、もしくは浅いと思われる学生が見られた。しかし、病欠の1人を除き全員が模擬保育を行うことができたのは、「保育実践演習」という教員間の連携がある科目との連携で実施することができたからである。

今後は、カリキュラム構成のみで保育者を志す学生全員が保育実践力の基礎を培うことを考えていくだけでなく、科目間・教員間の連携と、保育への意識が低い層などへの援助も含めた、生成されるカリキュラムのあり方について探索することも必要だと考える。

---

〈引用・参考文献〉

- 池田幸恭・伊瀬玲奈・鈴木みゆき他（2009）「保育現場が求める実習生像の分析（1）」『日本保育学会第62回大会発表論文集』 pp.269
- 松村真宏・三浦麻子（2009）『人文・社会科学のためのテキストマイニング』誠信書房
- 松山由美子（2009）「保育者養成における学生の学びの過程と成果―「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価をとおして―」『日本保育学会第62回大会発表論文集』 pp.271
- 松山由美子（2008b）「保育者養成における「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価」『四天王寺大学紀要 第46号』 pp.233-254
- 松山由美子（2008a）「保育者養成における保育案作成と実践力の育成」『日本保育学会第61回大会発表論文集』 pp.513
- 文部科学省（2004）『幼稚園新規採用教員研修資料 新しい先生とともに』
- 大岩みちの・鈴木方子・村岡真澄（1999）「保育における実践的指導力の育成に関する研究：（1）園など受入れサイドの保育者が求める実践的指導力について」『愛知教育大学 幼児教育研究 第8号』 pp.13-33
- 四天王寺大学短期大学部保育科（2009）『平成20年度「保育実践演習」研究報告書 「保育実践演習」を核にした養成カリキュラム～学外実習と学内教育の融合をめざして～』
- 鈴木裕子・小平英志（2008）「保育者養成における初年次教育の試み（1）―保育基礎演習：教員の視点からの検証―」『全国保育士養成協議会第47回研究大会研究発表論文集』 pp.218-219
- 小平英志・鈴木祐子（2008）「保育者養成における初年次教育の試み（2）―学生の授業評価からの検証―」『全国保育士養成協議会第47回研究大会研究発表論文集』 pp.220-221

〈謝辞〉

模擬保育の実施にあたっては、「保育実践演習」の貴重な時間をいただきました。保育科の先生方にこの場で改めて感謝いたします。また、学生たちの思いがあふれている膨大な自由記述をデータ入力してくれた大阪教育大学大学院生の鶴田利郎さんと山下真由さんにもお礼申し上げます。

## Re-design and Results: The Learning Community to Cultivate the “Professional Ability of Nursery Teachers” in the Nursery Teacher Training Curriculum

Yumiko MATSUYAMA

A trial curriculum was designed to nurture "the Professional Ability of Nursery Teacher" of junior college nursery teacher trainees by training them to plan, program, execute, and evaluate the curriculum.

Emphasis was placed on creating awareness of the “relationship between theory and practice”. Construction of the curriculum benefitted from the results of a survey of last year’s learners, and this paper tries to re-design the learning community by achieving progressive steps in for learner’s “trial teaching” through cooperation with subjects in the nursery teacher training curriculum. This learning community was evaluated from the results of a learners’ questionnaire.

Survey results showed that 1) most learners can change their mind-set in their care and education system, regardless of having a sense of success in “trial teaching”, 2) this community awakened the learner’s self-exploration of the “relationship between theory and practice”, 3) it is sometimes difficult to construct the “relationship between theory and practice” for learners without a full understanding of basic knowledge, behavior and educational skills for nursery teachers.

**Keywords:** Professional Ability of Nursery Teacher, Curriculum Design,  
Relationship between Theory and Experience,